

堀川開削410年をふりかえる

堀川をめぐる人びと

いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

治水に尽力した武士 水野千之右衛門と武藤加六

天明4年(1784)に新川の開削に着工し、同じ年に大幸川の堀川への接続という大工事が行われた。この事業を担当したのが普請奉行の水野千之右衛門と、杵奉行(水利普請などを担^{せがえ}当する藩の役職)の武藤加六である。

名古屋台地の北・西地域は平坦で低湿な沖積平野が広がっていた。そこを流れる庄内川や矢田川は年々土砂が堆積して天井川となり、いったん大雨が降ると大災害を引き起こした。また大幸川・笈瀬川等の小河川はあふれやすくて水が引きにくい川であった。このため、流域に住む人々はしばしば起きる水害に泣かされ苦しんでいた。その抜本的な改善をはかったのが2人である。

水野千之右衛門(士淳) 藩内の治水に尽力

水野千之右衛門は、宝暦4年(1754)にさまざまな記録を担当する留書見習で初めて出仕し、明和6年(1769)に警備などを担当する新御番に配置換えとなった。安永5年(1776)に財政や訴訟などを担当する勘定奉行並みとなり、翌年勘定奉行に就任し、天明4年に杵奉行兼務となっている。この年、庄内川が大水の時に、一部の水を分流させて庄内川の負担を軽減させる新川の開削に着手し、大幸川の瀬替も行っている。

天明6年8月に普請奉行に職務換となった。しかし閏10月に勘定奉行の時の新川や日光川などの工事で金銭面の問題があるとして、御馬廻組へ職務換し謹慎が命じられた。

2年後の天明8年に岐阜奉行となり、その後国奉行を務めた。寛政4年(1792)に6年ぶりに普請奉行に復帰し、8年まで4年間務め、以後、小普請頭を経て文化14年(1817)に退役を願い出ている。

その5年後、文政5年(1822)に享年89歳という、当時としては非常な長寿を全うし亡くなった。石高は時期により異なるが、普請奉行の時には足高を加えて300石であった。

自分を犠牲にしても水害の軽減を

天明6年に普請奉行を解職し謹慎が命じられた。新川開削にあたり、最初はずっと低い金額で見積をつくり着工の同意を得て工事を始めた。しかし巨費を要することが分かり謹慎となったのである。千之右衛門は最初からこれを予想し、工区を200以上に分けて一斉に着工していた。このため藩は工事を中止できず、天明7年に新川は完成した。日光川の改修も同じ手法で工事を始めている。その後、功績が認められて岐阜奉行で復職し、文化8年には河川改修で水害が減ったということで、「太刀馬代御礼席」という上級家臣の扱いになっている。

文政2年には、新川の南28か村の住民が顕彰碑を新川堤防(比良新橋北東)に建て功績をたたえている。



水埵士淳君治水碑
(比良新橋北東)

武藤加六 下級武士ながら優れた手腕

武藤加六は宝暦2年(1752)に農業用水を担当する水奉行の手代として初めて出仕している。その後、国方手代、地方目付、時の藩主宗睦の生母である英巖院付き、小普請組を経て、安永8年(1779)に杵奉行になった。

杵奉行の時に、天明4年から始まった新川の開削事業、大幸川の瀬替事業、寛政2年(1790)から始まった庄内用水を御用水と一緒に取水するように変更する大改修工事などを、水野千之右衛門の配下で行った。

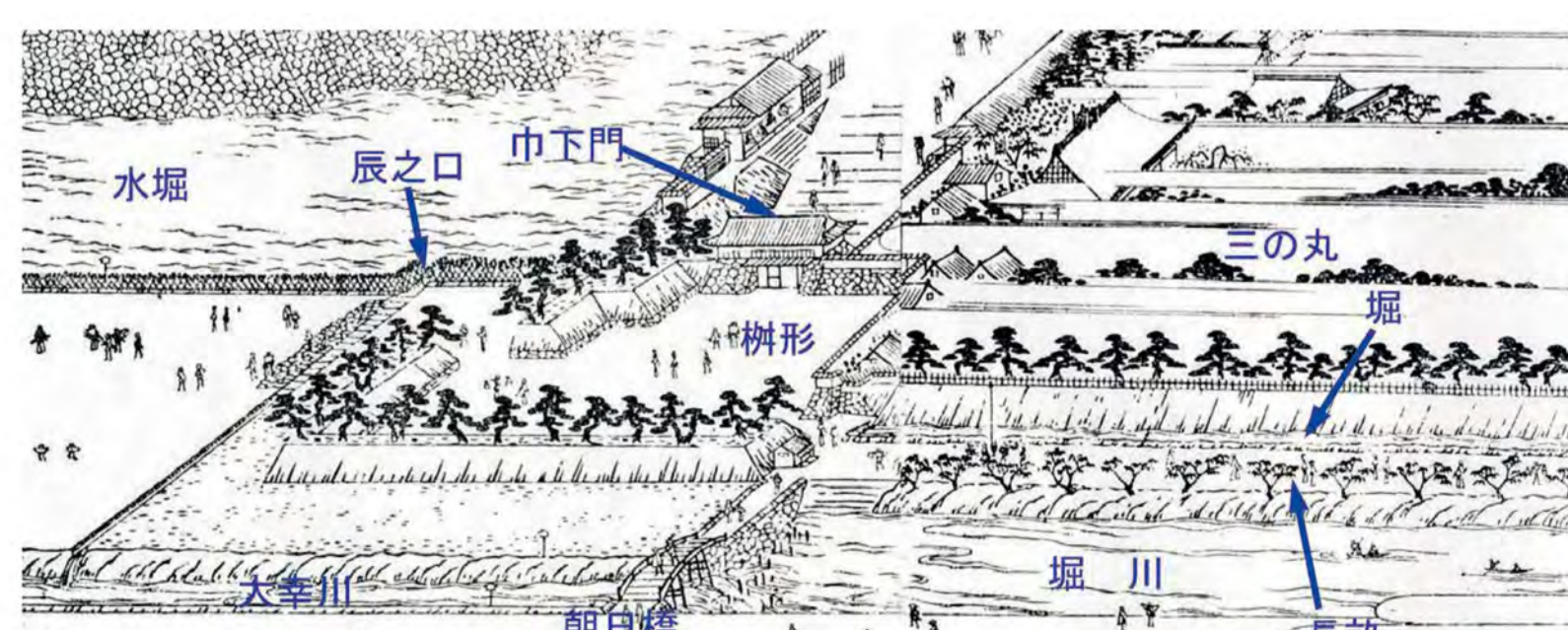
河川改修に大きな足跡を残したが、杵奉行在任中の寛政11年に病死し、享年は不明である。禄高は9石2人扶持から何度かの加増で25石3人扶持になったが、小身の武士である。

多忙のなかでも精一杯の努力

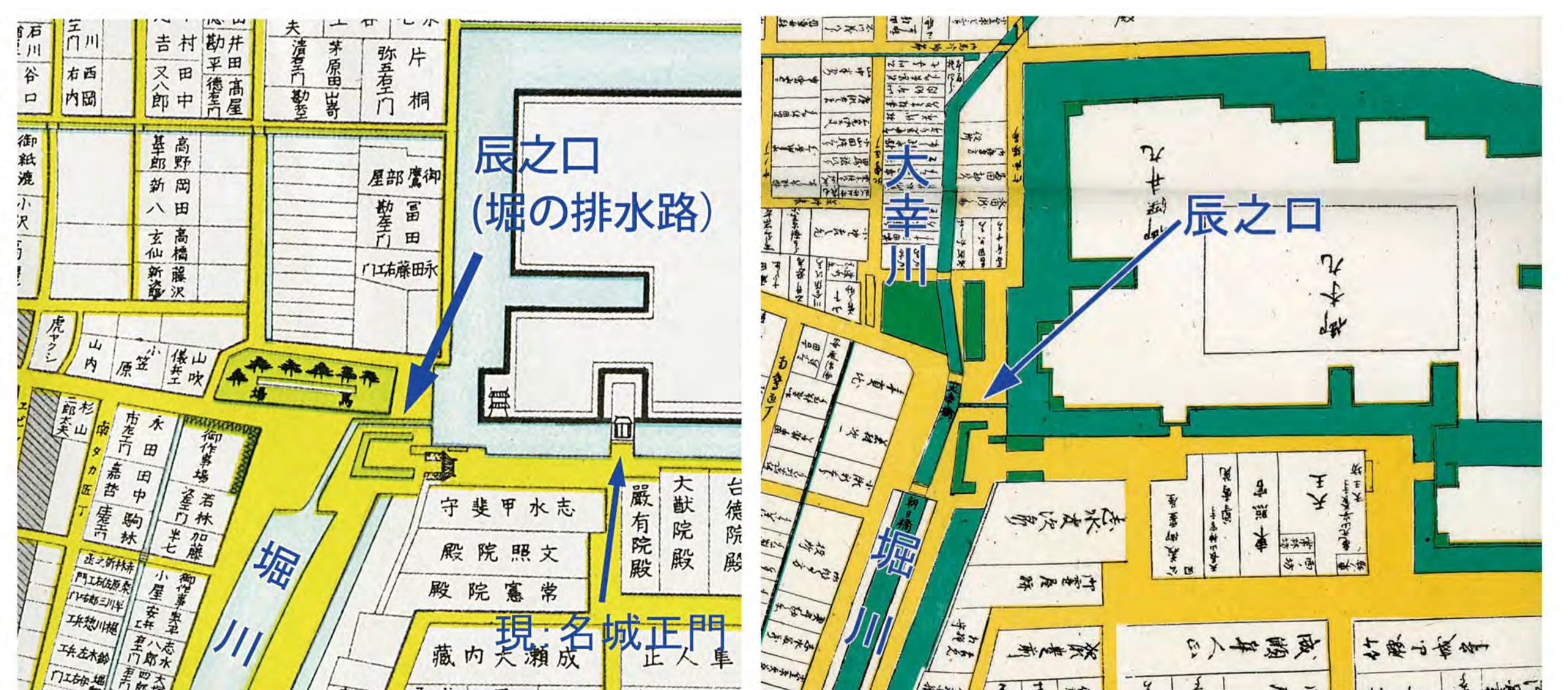
杵奉行になって9年後の天明8年に、河川工事が増えて忙しいなか精を出して働いているとして、10石の加増がなされている。

大幸川の瀬替

大幸川は東区の大幸町附近から流れだし笈瀬川に流入する、城北地域の幹線排水路であった。しかし流入先の笈瀬川は、幅が狭くて浅く勾配の少ない川なので流下能力が低かった。このためより排水能力が高い堀川へ流れ込むように流路が替えられた。これにより朝日橋の所で堀留(行き止まり)になっていた堀川に上流部が生まれた。



大幸川の流路替えて堀川に接続
(巾下新馬場より御城を望む 尾張名所図会に付加)



大幸川接続前
「元文3年名古屋図」1738

大幸川接続後
「安政名古屋図」1854~60